

シリーズ 学校紹介



宝小学校は、都留市大幡一一四番地(海拔四八〇m)に所在しています。

児童総数二六四名(57年7月1日現在)、一〇クラスと理想的な規模です。

宝小学校では、四年前から、児童の体力づくりを図ろうと、マラソン・リズム体操など様々な試みを行なっています。

これは児童の体力測定を行なったところ、柔軟性や敏しょう性などが、かなり低下していることが分ったためです。

しかし、体力づくりには、苦しいトレーニングよりも、児童が好む「遊び」を取り入れる方が有効であるとの判断から、最近では古タイヤなどの廃品を利用したアスレチック施設や竹馬などが活用されています。

また、体育の授業のときには、準備体操がわりに、これらの道具

を利用しています。

最初は遊び道具にとまどいがあった児童も、最近ではすっかり慣れて、なかには新しい遊び方も考案する子供もいて、効果は十分上っています。

あそびを学ぶ大切さ

宝小学校では、生活時程表のなかに「あそびの時間」を組み入れて、あそびを学ぶ大切さについて真剣に取り組んでいます。

現代っ子はよく、遊び方がへたであるといわれます。

この原因はいろいろありますが特にテレビ文化に代表されるように、受け身のあそびである程度の満足感はいわゆるように社会のしくみがなっていることにあります。しかし、本当のあそびのようこびは、自ら工夫して完成させ、他との比較で改良を加えるプロセスにあります。

竹馬にしても、既製品では手づくりによるもののような愛着は湧いてきません。

こんな意味あいから、魚のとり方についても実際経験し、あわせて他校との交流も深めようと、七月六日、グリーンロッジ近くの大幡川で、大月市のやまびこ養護学校の児童四十九名と、宝小六年生三十六名が参加して、マスのつかみどりを行ないました。

宝の時間の一コマ



ことなどない両校の児童は、最初

なれない手つきで魚を追っていましたが、時間がたつにつれて魚はしつぽからつかむより、頭の方からつかんだ方がとり易いこと、背中をおさえるより、腹の下をおさえた方が魚が逃げないことなどを学びました。

学習としてのあそびは、これを工夫することによって向上心の育成にもつながるわけです。

7月3日に全校を10のグループに分け、七夕のかざりつけを行ない、川上校長より各賞の表彰を行いました。



学びのまほろば

宝の郷

——山に明るい日の光、川にやさしい雲のかけ、いろいろ多い七里に——(校歌の一節)

宝の郷は、市の北西に位置し、三ツ峠に源を発する大幡川と、南の山間を流れる加畑川に沿って発達している。

明治の初めに大幡・中津森・金井・加畑・平栗・厚原・川棚の七カ村が合併し、七福神の乗る宝船に因んで宝村という村名を付したといわれる。

——軒にうたうよおきの音、谷にひびくよ鉦のさえ、みのりも豊か七里に——

山間の川によって拓かれた縦長の土地を利用して、平坦部には水田が、山つきには畑が経営され、古くから養蚕、織物が隆盛を極め村内戸毎にハタ織のオサのひびきが山峡にこだましていた。

——あした希望に燃えあがり、

夕べ未来の夢を追う、日本の真中七里に——

時代は変わって、専業の農家や機屋は姿を消し、機械工業のめざましい進出、大資本によるゴルフ場の建設、青少年の野外活動施設グリーンロッジの完成等大きく変容し、住民の大部分は勤め人となり近在の工場、会社へ働きに出ていく。

この佳き郷の中央部に建ち、近代的施設、設備を誇る学舎には、昭和五十五年の学習指導要領の改定に対応して策定された——よく考える子・がんばりのきく子・思いやりのある子——の子ども像をめざして二六四名の児童が、十七名の教職員に学んでいる。

この二十一世紀にむけて生きていく子どもたちのために、独自の学習展開過程、計画的学習の訓練計画が用意されて、ひとり学びのできる子どもたちの育成につとめており、生活時程表には、三つの時間帯に分けた「あそびの時間」と、始業前の「たからの時間」が設けられ、体力づくりと縦割りの異年齢集団による自主的活動が展開されている。

P.T.A活動も活発で、家庭の教育力を高めるための学習と実践が行われており、育成会と共同して学区内の団体、機関に呼びかけ、「青少年健全育成懇話会」を開いて「あいさつ運動」「叱る運動」を通して、明るいふれあいの宝の郷づくりに努力している。